

## 研究ノート

## お金の嘸 奥方一両損(おくがたいちりようぞん)

増田辰良

― 今日、お金にまつわる美しい、心が洗われる、そんな嘸を聞いていただきます。いや、読んでもらいすかな。お金、お金、これがないとなんにも始まらない。あつてもすぐになくなっちゃうので、お足なんて呼ぶこともあります。逃げ足がめつぼう速いんです。とくに、わたしのような貧乏人の懐からは…待ってくれ！ って追っかけてもダメですね。ウサイン・ボルトよりも速いですから。なので、この人生をお金のために生きてるんじゃないかって方もいますけどねえ。悔しいから、この前、お釈迦様と閻魔様に電話して聞いてみたんですよ。すると、いくら持っけていても、あの世まで、持っけて行った方はいないそうですよ。着の身着のまま、三途の川を渡る舟に乗っけてくれて、言われちゃいました。ほどほどに稼いで、後には残さない。きれいさっぱり使い切ってから、あの世へおいでって、アドバイスをいただきましたよ。使い切れないほど持っているなら、生きてるうちに困っている他人様に寄付でもして差し上げなさいってねえ。

…これはわたしの持論なんですがね。金にあくせくせずに自分のやりたいこと、決めたことをやり通したいですねえ。それでもって他人様に楽しんでもらったり、笑っていただきたい。で、こんな創作を一生懸命、やっているわけでした。

落語の中にも「お金」を扱った嘸はけっこうあります。いつの時代

も金への執着度をみれば、その人の性根が分かるって、ことです。世の中、欲深い人、浅い人、また欲はあつてもそれを自制できる人。実に様々です。そこで、今日の嘸は「欲はあつてもそれを自制できる立派な庶民」にかかわるものです。日本人にかつてあつたであろう人情と言いますか、道徳観がほとばしる嘸です。そんなヒントになる古典落語を参考にさせていただきます。

今日の嘸は古典落語「三方一両損」(古今亭志ん朝 京須偕充・編、二〇〇四、『志ん朝の落語 6』ちくま文庫所収)を改作(リメイク)したものです。オリジナルも改作も嘸の味噌は大岡裁き(政談)にはなく、

『江戸っ子は宵越しの金(銭)を持たない』

このことわざの中にあります。これは、すべての江戸っ子に当てはまることじゃありません。一部の職人たちの世界でのことわざです。職人は腕一本で食っていけますので、稼いだ金はその日のうちに使い切ってしまう。金がなくなれば、また働けばいい。なので、金を残すということを知らなくてもいい。金に執着しなくてもいい。金に勝る大事なものを他に持っているようです。ただし、これには諸説あります。それは解題で話します。

この嘶の主人公は、大岡越前守ではなく、大工の吉五郎でも左官の金太郎とも違います。もう一人います。

吉五郎は稼いだ金のうち、いくらかを仲間の大工たちに融通していません。

「余裕のできたときに返してくれればいいと言ったのに、今日、取りに来てくれと言うものだから、こうして全部返してもらったんだあ、なあ。仲間って、いいもんだ。ほんと感謝、感謝」

その帰り道のこと。吉五郎、腕の立つ大工ではあるが、根っからの酒飲みです。この金を懐にしたまま、いつもの飲み屋で一杯ひっかけてから帰ります。

「(酔声) あゝあ。いい心持だ。懐に大金が入っていると、こうも嬉しいものかねえ。金持ちは、いつもこんな心持をしてんだろうなあ。ウイ、ウイ。お酒、飲む人、花ならつばみ、今日も酒(咲け)、酒(咲け)、明日も酒。ウイウイ。でもよう、仲間から金を回収するっていうのもどうも、いい心持はしない。おれも借りることがあるから。申し訳ねえ(顔の前で両手を合わせます)」

千鳥ならず、ムカデのように右へ行ったり、左へ行ったり、歩を進めます。

柳原町(今の万世橋あたり)へ来たところで尿意をもよおします。このとき奴さん、腹が張っていたようで帶を弛め、防火用の水溜桶の陰へ隠れてジャージャーと小汚い小便を垂れ流します。すつきりいたしますと、また体を前後左右へ揺らせながら歩を進め、なんとか長屋に転がり込みます。

ちようど、その後を追いかけてくるかのように別の酔っ払いが同じ

場所では小便を垂れ流します。まるで犬のマーキングのようです。用を終えまして、さて行くかと足を一歩二歩出すと、草履の先に絡まるものがあるんです。

「(酔声) なんでえ、なんでえ、ウイウイ。草履の先に」と、しゃがんで手に取ると、これが汚い巾着袋(財布)です。

「汚ねえ、巾着だ」

こんなものとは、放り投げようとする、その重みで手が止まりません。開けて中を覗き込みますと、

「うん。なにか入っている。印形(印鑑)と書き付けが一枚、二枚：六枚。おお、おゝお、金だ！」

金が目に写ったものだから、いっぺんに酔いが覚めてしまいます。手の平に出して数えてみると、なんと三両あった。書き付けは貸金を返済してもらった証文です。貸し主は神田小柳町大工の吉五郎、借り主はどれも大工のなにながしとなっています。

「トシマな野郎だぜ。三両といえば大金。この吉公、仲間から回収した金を落としたんだよ。回収なんてするからあ、きつと罰が当たったんだ。さて、どうするかな。拾った金は自身番か奉行所へ届け出るもんだあ、なあ。餓鬼のころから、そう言われて育てきたあ。でも、住所も名前も分かる。お上に届け出て、痛くもない腹を探られるくらいなら、持って行ってやろう。届けてやろう」

と、男は親切心を起こします。

一方、吉五郎は帰宅後、巾着を神棚に上げておこうと懐を探ります。しかし、手に触れるものがない。しまいには帯を解いて、ふんどしの中まで探しますが、別の大金玉はあっても巾着はありません。

「あっちゃあ。落とし落としちゃったよ。仲間から返してもらっ

た金を……」

こちらもいっぺんに酔いが覚め、呆然自失(ぼうぜんじしつ)の状態になるも、小便をしたとき帯を弛めたことを思い出します。

「あゝあ。あのときだあ、きつと」

と悔やみますが、根は生粋(きんすい)の職人です。立ち直りも早い。

「どこかの誰かが拾って使ってくれりゃあいい。貸した金をなまじつか返してもらったりするから、こうなるんだあ、なあ。『飲らぬ酒には酔わぬ(注)』。えゝい、また働いて稼げばいいじゃないか。これ以上の悪運は、もうないだろう。いい厄祓(やくばち)いができた。良かった、良かった。そうと決まれば飲み直そう」

そう自分を納得させて、酒を飲み始めます。

巾着を拾った男の方はいいますと、道すがら通行人に長屋の在り処を教えてもらい、ようやく吉五郎の戸口まで来ます。障子戸に小さな穴を空けて、覗いてみると、男が鰯(いわし)の塩焼きでもって一杯飲んでいきます。

「ええっ？ 酒くらってらあ。ドジだねーえ。トンマだねーえ。トンマ天狗もビックリするぜ。大事な金を落としておいて、よく酒が飲めるねーえ。とんだノーテンキ野郎(やろう)だぜ」

その不穏な空気に気づき、吉五郎は、

「おい！ 誰だ！ おれん家(うち)を覗きやがって。借金取りか？ 借金なら金のあるときに返す。担保は、今のおれの啖(たんか)阿(あ)だ！ でなきやあ、開けてとっとと入ってきやがれ」

と息巻きます。

「当たり前よ。開けずに入れるか。開けずに入れるのは屁(へ)くらいなものだー」

と返して、男は、

「お前がドジでマヌケな吉五郎(きごろう)かあ」

と、なぜか凄(すこ)みます。

「そうだとしたら、てめえはこの馬の骨だ」

「おれは白壁町(しろかべちょう)で左官をやっている金太郎様(さま)だ！」

「なに？ 金太郎。金太郎なら、赤い腹巻はどうしたい？」

「腹巻だど？ あれは餓鬼(がき)の頃に着けてゝ、おつと。冗談(じょうだん)は、よせやい！」

「それに自分の名前に様を付けるヤツがどこにいる？」

「なんだとー。ここにいるのよ。耳の穴をかつぽじって、よく聞け。いいかあ、聞いて驚くな」

「どうしたい。お天道様が西から昇ってきたのかい？ 月のウサギが餅撒(もちま)きを始めたか？ へっへっへっ」

「よくもまあ、減らず口がたたけるな。てめえは巾着を落としただろ。おれはそれを拾ったから、親切心でここへ届けに来てやったんだ。どうだ！ おまえにとつちや、恩人(おんじん)だろ。よって、金太郎様(さま)だ！ さあ、おめえに渡すから、いいか？ 中身を改めて、受け取れ！ (吉五郎の膝元へ巾着を置く)」

「(いまいましそくに) こんちきしょう！ 余計なことをしやがって」

「(きよとんと) なにがあ？」

「(しらっと) なにがあ、じゃないよお。こつちの事情も知らないくせして？ こつちは金を落としてさばさばして、これでもって厄祓(やくばち)いだあ、悪運を祓(はら)ったあ、ありがたいことをしたあ、と思って、こうして祝杯(しゅはい)を上げてんだあ。それをおれが大工だからといってノコノコ持って来やがって。てめえの方こそトン馬(ま)だ！ 馬の尻の穴にセメントを詰めてろ！」

「……？」

「（中を改めて）そりゃあ、おめえ、印形と証文はおれの物だ。この証文…、仲間が金を返してくれた証文だ。命の次に大事なもんなんだ。あ。（しらつと）だが、金はいらぬ。（金だけ残して巾着を放り）てめえにやるから持つて帰れ。好きに使え。富士山でも、たこ焼きでも買いな」

「こんちきしょう。なにをしゃがるんでえ。大事なお足を放（あし）げたりして。おれは礼を言つてもらつたり、金が欲しくて届けに来たわけじゃねえ。おめえが困つてゐるだろうと思ふから持つて来てやつたんだ。なんで、受け取れねえ」

「…おめえの知つたことか」

「なに！ てめえの金じゃないか」

「いいかあ、そりゃ以前はおれの金だつたかもしれない。しかし、断りもなく、この懐から飛び出したんだ。二度と敷居をまたがせねえ。未練はねえ。受け取つて大事にしまつておくなんて、そんなさもしい了簡（りようけん）はおれにはない。拾つた褒美（ほうび）として、てめえにくれてやる。持つて帰れ！ 持つて帰らなきゃ、張り倒すぞ！」

「（腹にすえかねて、腕をまくり）黙つて聞いてりゃあ、いい氣になりやがつて、親切に届けてやつたのに、張り倒せるものなら倒してみろ！」

「そうか。じゃあ、張り倒してやる。このおせっかいやきめ！（吉五郎が金太郎の頭をポカーンとたたきます）」

「痛い！」

今度は金太郎が吉五郎の頭をたたきます。

「やりやがつたな。こんちきしょうめ！ こんちきしょうめ！」

ドタンバタンと大変な喧嘩が始まりました。長屋の壁は薄いもの、両隣の住人は慌（おそ）てて大家（おや）を呼びに走ります。後から金太郎の大家も駆けつけます。二人の大家は喧嘩の原因を聞き、呆（おろ）れ果てます。

「二人にとつて不要な金であれば、ねえ、金太郎の大家さん、わたしたちでいただくことにしませんか？ 半分ずつ」

吉五郎の大家が提案します。その顔はニタニタと笑っています。「それは名案です。そうしましょう」

金太郎の大家も声を出して笑っています。すると、吉五郎が怒つたの、なんの。

「ヤイ！ クソ大家！ ションベン大家！ おれはこの金を金太郎にくれてやる、と言つてゐるんだ」

すぐさま、金太郎が言い返します。

「冗談じゃねえ！ おれはてめえに返しに来たんだ」

「なんだと。受け取れ！」

「いらねえ！」

と、また喧嘩を始めます。

これでは埒（らち）が明きません。二人の大家は乏しい知恵を絞るよりも知者の判断を仰（うや）ごう、と話がまとまります。南町奉行所へ連名で願書を提出します。これを大岡越前守様がお読みにになります。

さて、越前守は屋敷にて、なにやらソワソワしております。それを夫人（うき）が咎（とが）めます。

「（女性の声音で）なにか、心配事でもあるのですか？」

「うん、えへん、うん、その、あれだな。小遣いを前借りしたいのだ」

越前守は背筋を一直線に伸ばし、お辞儀の見本のように、前傾姿勢四五度を取りまして、スツと頭を下げます。

ここでちょっとお辞儀について説明しますね。お辞儀には三パターンあります。一つ目は、軽いお辞儀で会釈ともいいます。これは背筋

を伸ばして、一五度ほど体を前傾させます。(前傾姿勢をとって)こんな角度でしようか。二つ目は、一般的なお辞儀で、中礼と呼んできます。これは三〇度ほど前傾させます。(前傾姿勢をとって)こんな角度ですかね。お客様の送迎時によく使われます。最後の三つ目が最も丁寧なお辞儀でして、敬礼と呼ばれています。傾きは四五度です。(前傾姿勢をとって)これくらいの角度になりますかね。冠婚葬祭や感謝を示すとき、お詫びをするときに使います。越前守は四五度の前傾姿勢ですので、感謝の意を込めたり、お詫びをしているわけです。ですから、いくら夫人といえども邪険にはできません。天下の名奉行ですからねえ。

「え、またですか。わが家の家計も楽じゃありませんから。あなたの交際費支出が増えて……」

と、まあ一応、夫人は、もううんざり、という声で答えます。

「分かっておる。お忍びで市中を見て回ったり、遊興に耽るのも、これすべてお役目のためじゃ。庶民の上に立つ者が庶民の生活や風情を知らずして、勤まるものか」

「そう言われても、あなたは世間が思っているほど高給取りじゃないでしょ。ベースアップありませんし」

「んんっ。お前は、なぜ給与で人の心根を測ろうとするのだ？」

「これだけ、出費が多くなれば、ぼやきたくもなりますよ」

「(越前、丁重に頭を下げ)すまん。お前のやりくり上手に助けられていることは重々、承知している。が、次回のお裁きだけは後世に残るものにしたいのだよ」

「毎回、あーせえ、こうーせえ、と言っては前借りしてますよ」

「実はな。話さないと分かってもらえないと思うが」

「わたしも聞かないと分かりませんけどお」

「んんっ。この時代にしては稀有な職人たちの真つ正直な心に報いたいのだ。そのためにはどうしても一両、入用なのだ」

「えーっ！ 一両ですって。新幹線の車両じゃありませんよ！ そんな大金、公費で支出できないのですか？」

「それがな、奉行所も時代の波には逆らえず、経費削減でわたしが自由に使える予算は全額カットされたのだよ。これもご公儀のためである。(両手を顔の前で合わせ、拝むように)頼む。今回だけだ。一両。なんとか工面してくれ。わたしの名誉のためにも。頼む、お願い！ 母ちゃん！」

「母ちゃん」と言ったかどうかは分かりませんが、一両を工面してもらいます。

この一両をしつかり持って、いよいよ越前守の判決、吟味が始まります。

お白州の筵には吉五郎、金太郎、その大家二名が神妙な顔をして座っております。

そこへ、やけに恭しく、越前守が登場します。(まるで見得を切るように)ぐるっとお白州を見回してから、

「一同の者。面を上げい」

まるでヘビが鎌首をもたげるように、一同は顔を上げます。

「おどけた声音で」わたしが、かの有名な大岡越前守である。よろしく」

「はっはー」と、一同はまた頭を深々と下げます。

「苦しいやうない。楽にいたせ(笑)。これより、吉五郎が落とした金子の処遇について吟味いたす。吉五郎。その方、大工仲間から返してもらった大事な金子、三両を落とし、それを拾ってくれた金太郎が親切に届けてくれたにもかかわらず、受け取りもせず、あろうことか金



太郎の頭をたたいたそうであるな。これは事実か？」

吉五郎、顔を上げまして、

「へえ。間違いありません。なまじつか仲間から返してもらうようなケチなことをしたもんですから、罰が当たり、金が自分から出て行きまして、もうさばさばしましてえ、これで厄を祓ったも同然だあてんで、祝杯を上げていたところへ、（横に座る金太郎をちらっと見て）この野郎が大王のおれにノコノコ届けに来たもんですから、落とした金をまた懐にしまうほどさもしい根性じゃねえ！ 印形と証文は受け取るが、金は褒美としてやるから持つて帰れ！ って言っただんですが、強情な野郎でえ、受け取らないんですよ。で、『受け取れ』『いらねえ』の押し問答の末、『受け取らないなら』張り倒してもいいかと訊くと、いいと言うので、ポカーンと一発、やつちやいましたあ。先制攻撃です。これ喧嘩の鉄則です。はい。へっへっへっ」

聞き終わると、越前守は金太郎にも確認します。

「金太郎。今の吉五郎の言葉に相違はないか？」

「へえ。寸分<sup>すんぶん</sup>違わず、間違いありません。親切に届けてやったのに、馬の尻の穴にセメントを詰めてろ！ って、いくらあつしが左官であつてもその言い草が気に喰わない。その上、受け取らないと言やあ、張り倒すことではないでしょ。あつしもカッカツとなつて、ついポカーン、ポカーンと二発お返ししちゃいました。倍返しです」

「んんっ。双方の者たちに訊く。頭をたたくと、ポカーン、ポカーンと音がしたのか？」

越前守は不思議そうな顔をして訊き返します。

「へえ。お奉行様の頭と違って、あつしらの頭の中は十分に詰まっています。太鼓のように空洞があるんですよ。なので、たたくとポカーン、ポカーンと音が出ます。これがいい音色でして。つい、喧嘩

（六）

をしたくなるんですよ。どうも、へっへっへっ。試しにたたいてみましょうか（吉五郎は金太郎の頭をたたこうと手を上げます）」

「たたかずともよい。左様か。おもしろい言い回しじゃの。いい勉強になったぞ。さて、金太郎。その方、吉五郎が三両を褒美としてくれると言うのに、なぜ受け取らなかったのじゃ。えっ？」

「はばかりながら、あつしあ、ねえ、そんな三両ばかりの金をもらつたつてえ…そんなさもしい簡を持つていりゃあ、とうの昔に親方になつて、たんまり稼いでいますよ。…（涙声で）出世するようなそんな災難に遭いたくはねえ、と思やこそ…」

「よしよし、金太郎、泣くでない。心中の思いはよく分かつたぞ。では両名の者とも、この三両はいらぬと申すのだな。それならば、越前が預かりおくが、どうじゃ」

このところ家計が苦しいから、これをもらえば楽になると、越前守が思ったかどうかは知りません。

「そうしていただければ喧嘩にもなりません」

金太郎は頬を緩めて答えます。

「吉五郎、どうじゃ」

「へえ。あつしもそうしていただければ本望です。正真正銘の厄祓になります」

「よしっ。では、裁きを申し渡す。両名たちの真つ正直な心を愛でて越前が二両ずつ褒美をつかわす。この解決方法でどうじゃ」

このやり取りを黙って聞いていた吉五郎の大家が頭を上げて訊きます。「お恐れながら、お奉行様。二両ずつでは、合計四両。一両足りませんが」

「うん。左様。一両足りん。この一両、越前が出そう（懐から一両を出

し、かざします。が、なぜかその手は小刻みに震えています。夫人とのやり取りが脳裏をよぎるんですね。これ『三方二両損』と申すなり」

「お奉行様。分りかねますが」

吉五郎は金太郎に目配せしながら訊ねます。

金太郎も「分らん」という顔を返します。

「よし。教えてやろう。吉五郎、この金子を金太郎が届けてくれたときに受け取ってれば、そちのもとに三両ある。金太郎もまた、そのとき吉五郎からもらってれば三両ある。越前が預ければ三両ある。この三両に越前の懐から一両を加えて、四両とし、両名に二両ずつ褒美としてつかわす。これで三方とも一両の損、『三方一両損』。分かったかな？」

越前守は「どうだ! (このアイディアいいだろ)」という表情で両名を見ます。

「ありがとう、ございます。いただきます」金太郎は、また頭を下げます。

「へえ。なるほどお。あつぱれなお裁き。ありがたくいただきます」と答えて、吉五郎はさらに続けます。

「お奉行様。こういう機会もそうそうないので、お奉行様に教えていただきたいことが一つあるんですがねえ。へっへっへっ」

「これ、吉。余計なことを訊くじゃない」

大家が吉五郎の袖を引つ張ります。

「なんでえ。大家。『大家と言やあ親も同然、店子と言やあ子も同然』なのに毎月、店賃を取りやがってえ、おれは知りたいことがあるんだよー。放つといってくれ (大家の手を振り払う)」

「これ、大家、捨て置け」越前守がなだめます。

「この捨て置け大家め。『松のことは松に習え、竹のことは竹に習え』」

て言うだろー」

「吉五郎。よくそのことわざを知っておったの。さて、その方が教えて欲しいこととは、なにかな? 越前が答えられることであればよいが(えー)。お白州で質問なんて受けたことないよ。母ちゃん! どうしよう)」越前守は心中穏やかではありません。

「へえ。ありがとうござんす。瓦版を読んでいると、ときどき腑に落ちないことがあります。人はなぜさもし根性を起こすんでしょうかねえ」

「もう少し分かるように話してくれんか?」

越前守は訝るよう問い返します。

「へえ。あつしは思うのですが、規則は組織や国を秩序づけるものですよ。世の中には規則を自分の都合に合うよう勝手に変えて、大金を手に入れている輩がいますよ。それもその規則をよく理解しているであろう輩です。たいてい、そういう輩は腐るほど金を持っているんですがねえ」

俯いていた金太郎も顔を上げ、

「あつしもよろしいでしょうか」

と、越前守を見上げます。

「おお。金太郎、そちもなにか教えてほしいことがあるかな?」

「へえ。こんな輩もいます。役職を盾にして、首を縦に振るよう、無理やり不条理を働けと強要してくる輩。そんな輩も金持ちです。…」

と、ここで一呼吸おいてから、さらに続けます。

「あつしらのように学のない者はよく思いますよ。賢い者はその知恵や金を独り占めするんじゃないかと、世間の役に立つように使うべきだろうって。それがまっとうな血も情もある人つてものですよ」

顎に右手を当てまして、こう考える人のポーズをとっていた越前守

は静かに口を開きます。

「両名の者が教えて欲しい、知りたいこととは、吉五郎が言うところの何が人をさもしくさせるのか、ということじゃな」

「へえへえ。そうなるかと」

吉五郎は金太郎の顔を見てから答えます。

「越前の答えは、金への欲と信用を天秤に掛けるようなもの」だ。さて、どっちが重い」

越前守は両名の顔をしっかりと見て問い返します。

「金への欲と信用？」両名は顔を見合わせます。

「どうじゃ、両名の者たちも金は欲しいであろう？（わたしも欲しい！誰か、くれ!!）」

越前守は促します。

「へえ。本心を言えば、そりやもう金さえあれば、こんな場所にはいませんし、溜まった店賃を払って大家をギャフンと言わせてやりますよ」

なんてことを言うんだと、ばかりに大家が吉五郎の袖を引っ張ります。

「おもしろおかしく生きられます」

金太郎も愉しそうに答えます。

うんうんと肯いてから、越前守は論すよう話します。

「しかし、金持ちといえども、それを持つて死ぬことはできぬ。来世のことなど、誰にも分からん。大事なことは、足りることを知ることだ。持ち過ぎは無用の長物、邪念を引き起こす基となる。人は余分に金を手に入れると、他人に頼らずとも生きていけると錯覚しがちである。金さえあれば、望みの物はなんでも手に入るからのお。金に頼る、金を信用するようになって、さらに強欲になってしまふ。そうすると、相手を思い遣る心がないがしろになる。そこから自分さえよけ

(八)

ればいいというさもしい根性が起こることもある。悲しいかな、さもしい根性はときに自分への信用を失う原因ともなる。金と信用、どちらを選ぶかな？ 金太郎、どうじゃ」

「へえ。あつしはもう信用です。信用さえあれば、仲間が仕事を回してくれますし、困ったときは金も食い物も融通してくれます。生きていく上で一番、大事なもんですよ」

「うん。吉五郎。どうじゃ」

「あつしも同感です。金なんてその日、生きていくだけありやいです。つけ加えますと、あつしには信用がありますので、店賃を踏み倒しても、大家は怒らない。へっへっへっ」

いいかげんにしろと、目を吊り上げて大家が吉五郎の袖を引っ張り

ます。  
「そうであろう。両名の者にはさもしい根性など一片もない。あつばれな心よのお。それに感銘し、先ほど二両の褒美を授けたのじゃ。その方たちが身に付けている信用への褒美じゃ。これからもその信用を大事にするのじゃぞ」

越前守はそう言って満面の笑みをこぼします（格好いい。自分の言葉にうっとりします）。

「へーえ、へーえ」と両名、手をつき、頭を下げます。慌てて、二人の大家たちも、より深く頭を下げます。

「そう、恐縮することはない。今日は、越前、両名の者からこの上なく良いことを教えてもらった。頭をたたくとポカーンと音がすること（笑）、賢い者はその知恵を世のため人のために使うべきこと、それにも増して世を治める身として、さもしい根性など起こさず、役目に精進することを誓うぞ。また、見聞を広め、豊かではなくとも善人の心が賞賛される世になるよう、お裁きにも反映させるよう励むことに



しようぞ。越前、頭を下げて礼を言わせてもらう(頭を下げる)」

「おとおお、奉行様。滅(め)そうもございません」

「とんだことをお聞かせしまして」

両名は首と手を上げ下げして答えます。

と、本来ならばあ、この噺はここから一気にサゲへと進みます。が改作、リメイクした噺です。まだサゲへはいきませんよお。

これまで三名のやり取りを黙って聞いていた金太郎の大家が勇気を出して尋ねるんです。

「お奉行様。わたしも一つ教えてほしいことがあります。へえー」

「おお。なにかな？(でも、心中は穏やかではありません。答えられないと困っちゃう)なんなりと申せ」と、顔は平静を装っています。

「はい。では、お言葉に甘えさせてください。お奉行様のお裁きは規則どおりではないことが多いように思われます。いえ、決してそれがいけないというのではなく、実に理にかなっている、と思います。：お奉行様は規則やお裁きをどう考えていらっしゃるのですか？われわれ庶民にはとても関心が深(ちまた)こうございます」

すると、吉五郎の大家も「巷(ちまた)では、お情けに溢れたお裁きである、もっぱらの評判です。今日のお裁きも、両名が要らぬと言っている金子です。引き取り手のない金子は、規則に従えば、お奉行所が引き取り、保管、処理をすべきものです。それを三方一両損という形で両名に授けました。お裁きをする方の知恵とも思われませんが。：へえー」と言葉を付け加えます。

聞き終わりますと(な〜んだ、そんなことか)。チョー簡単！越前守は安心し、自信たっぷりな顔をして答えます。

「えへん。うん。規則を作り、適用するのはさほど大変なことではない(ニタニタ笑う)。過去の事例から学べばよいからのお。それならAIロボットでもできる。人間には、たとえAIであっても学習できない、身に付かない心根というものがある。心根。(語気強く)書かれた文物(文章)を読むだけの、多くの法学者がしている座学では世の役に立たない。それなら単なるロボットと同じじゃ。裁きの本来の目的は規則の適用ではない。もっと大切なことは、裁きをする者は法を犯した者や訴えを願(ねが)い出てくる者たちの心中を慮(おも)り、より適切な処遇をすることである。人が人を裁くのだから、裁かれる者の心中を知らずして、裁けるかな？いくら規則を学ぼうとも、この心中を知ろうとしない者には務まらない仕事なのだ。規則よりも人の心根が大(お)事じゃ。この心根の備わっていない法学者には、人は裁けん。心のないロボットと同じじゃ。どうじゃ、心根、分かるかな？これが越前の裁きの法である(チョー格好いい！良すぎる！)」

お白州の一同は(感心し)「へえ、へえ、へえ、へえ」と、頭を下げます。

すっかり気を良くした越前守は「アナザークエストョン？(他に質問はないか？)」と、慣れない英語でもって尋ねます。それを理解したのかどうかは分かりませんが、一同の者たちが顔を上げました。みんな理解していませんねえ。どの顔も「ワタシハニホンジン。エイゴワカリマセン(両手を横に広げる動作)」と言っています。

越前守はその顔へニッコと笑みを返してから、  
「(ゆつくりと、見得を切るように)これにてえ、一件落着！(あゝあ。やっと今日の業務が終了した)。うまく行って良かった)。チョー気持ちいい！さあ、帰ろう)」

一同の者は額に筵の跡が付くほど深く下げます。

お白州を出ますと、吉五郎が越前守の口真似をします。

「人が人を裁くのだから、裁かれる者の心中を知らずして、裁けるかな？」

金太郎も続けます。

「心根の備わっていない法学者には、人は裁けん」どうじゃ」

「さすがは名奉行だけあって、実にいいことをおっしゃる。暇そうなの……法学者に……を……聞か……やりたいねえ。ところで、金公、仲直りのしるしとして一杯（盃）を口へ持っていく動作）、こうやろうじやないか」と吉五郎が誘います。

「いいね。『苦しゅうない』と話がまとまります。

それを大家が厳しい口調で論じます。

「懐が温かくなつたからといって、飲みすぎ、食べすぎはよくないぞ」

二人は心配ご無用とばかりに答えます。

「へえ。金がなくなるまでは飲まね（ノーマネー）し、おおかあ（大岡

Ⅱ多くは）食わねえ」

「たつた一膳（越前）」

と、オリジナルはここでオチです。終わりです。でも、さきほども言いましたが、これは改作、リメイクです。もう少し、おつきあいください。

さて、無事にお裁きも終了いたしましたして、越前守は帰宅いたしました。根がエエ格好しいです、お白州での名裁き振りを意気揚々と夫人に話します。しかし、夫人は慰勞の言葉を掛けることなく、不満げな顔で返してきます。

「うーん。なぜ、もっと機転を利かせないのよ。この人はあ、いつ

も格好ばかり気にして。もううーもう、嫌い！ その三両を三人で山分けすれば……そうすりゃ『三方一両損』で終わったでしょー」

と、悔しいものだから、思わず越前守の背中を軽く打つんです。

それをしつかり受け止めて、

「おいおい、ご公儀の身にある者がそのようなさもしいことはできませんよ。『三方一両損』で良かったのだ。この名裁きは大岡政談として、きつと後世へ語り継がれるであろう。落語や講談となつて（俺ってえ、やつぱ格好いいな）。ふっふっふっ」

「後世ですかあ。そんな先よりも今日のわが家のやり繰りを心配してくださいよ。ほんと、頭にきちゃうー。いいですか。今夜のおかずはタクワン五枚とメザシ三匹ですから。それに晩酌はナシ！」

越前守はガックと首を垂れてしまいます。まるで母親に叱られた子供のようです。

夫人は「ふん」と鼻を鳴らしてから続けます。

「ところで、貸した一両はいつ返してくれるのですか？」

「それは……それはだなあ……」

越前守は答えに窮します。

夫人はキツと睨みつけ、

「奥方一両損」

## 解題

古典落語も創られたときは新作落語でした。長い年月をかけて、多くの噺家たちに推敲されて、今の完成形に至ったはずなんです。なので、今、聴いたり、読むと空想を逞しくさせられる部分が幾つかあります。『三方一両損』の中にもそんな部分があります。

最初に、吉五郎が巾着袋に入っていた三両、印形、書き付け、この

三点セットはなにを意味するのか。落語好きからすると、正しい史実があるが、その意味を空想することはこの上なく愉しい知的作業です。とくに、書き付けが意味するものはなにか。いかようにも意味づけできますが、筆者は返済金の証文として捉え、漸を膨らませました。

次に、越前守が出した一両。これはポケットマネーなのか、奉行所から出した公金なのか。名奉行であれば、公金はいらない。あつて欲しくない。ポケットマネーと理解したい。でなければ、空想力も萎んでしまいます。筆者は夫人を説得して家計から捻出したものと書きました。その方が名奉行の庶民的な素顔を描けると考えたからです。こう描くことによって、漸をコミカルなものに仕立てました。これはサゲへと通じています。そして立川志らく(二〇一三、三〇八―三〇九頁)が言う、この(オリジナルの)漸のサゲのくだらなさを克服しようとしてみました。

最後に、やつかいなことは吉五郎と金太郎が「金を貯めること、出世すること」を『さもしい』と言って自身を戒める心情はどこから出てくるのか。これをどう空想するか。筆者の関心は越前守の名裁き振りよりも、これにあります。そのヒントは『江戸っ子は宵越しの金をもたない』ということわざの中にある、と考えました。時代考証に疎いまま空想を巡らせてみます。なぜなら、空想に生きる者のみが、芸術家たり得る資格を有しているからです。

ここという江戸っ子とは士農工商のうち工、つまり、主に日銭を稼ぐ職人(日雇い労働者)のことだそうです。その職人が「宵越しの金をもたない」とはどういう意味か。三つの意味を空想してみました。

第一に、金を預ける機関もなく、貧相な家の中に貯えれば、ドロボウに入られるかもしれません。また、頻発する火事で焼失しかねませ

ん。なので、稼いだ金はその日の内に使ってしまう。

第二に、職人を含む庶民は相互扶助組織に加入し、相互扶助精神に富んでいた。困ったときは金品を融通されたので、金がなくても生活はできた。みんなのために金を拠出するので貯めることを知らなくてもよかった。

第三に、仕事があれば、稼げないので単にその日暮らしの金しか持てなかっただけのこと。

これらの意味から、次の結論に達しました。

みんなが貧乏であるが故に、安定した秩序の中にいられる。この横並び精神とも言える秩序を崩すような振る舞い(金を貯めること、出世すること)を『さもしい』という言葉で表現したのでしょう。これは自分たちがなれそうにない金持ちや出世した者たちのさもしい振る舞いへの嫉妬心の裏返しなのかもしれませんが。いずれにしろ、この言葉は職人たちが置かれた社会的環境に起因するものでしょう。が、まだまだ空想力不足かな。

さもしい根性は時代を超えて蔓延しています。現にこの文章を創作している今(二〇一九年一月二五日)も公的な統計数値を改ざんする官僚・役人たち、金の亡者と化した経営者、すべて厄祓いとして梵鐘をゴーン! と打ち鳴らしたいですよね(笑)。

## 注

1. 『飲らぬ酒には酔わぬ』とは、酒を飲まなければ、酔わない道理で、良い結果にはそれなりに良い原因があり、悪い結果には悪い原因がある、という意味のことわざです(時田、二〇一八、一七八頁参)。

2. 『松のことは松に習え、竹のことは竹に習え』とは、分からないことは

専門家に素直に聞いて、教えてもらうのが最善の策である、という意味のことわざです（時田、二〇一八、二九頁参）。『餅は餅屋（専門家に任せよ）』とは違います。

# 引用・参考文献

- 石井公成（二〇一七）『「ものまね」の歴史』吉川弘文館、一七二～一八一頁。  
 入江雄吉（一九九四）『落語で経済学』PHP文庫。  
 奥山景布子（二〇一七）『寄席品川青洲亭』集英社文庫。  
 奥山景布子（二〇一八）『すててこ』集英社文庫。  
 門田誠一（二〇一八）『はんこと日本人』吉川弘文館、一〇一～一一〇頁。  
 河合莞爾（二〇一五）『粗忽長屋の殺人』光文社。  
 車浮代（二〇一八）『落語怪談 えんま寄席』実業之日本社文庫。  
 古今亭志ん朝 京須偕充 編（二〇〇四）『三方一両損』『志ん朝の落語 6』ちくま文庫所収。  
 立川志らく（二〇一三）『落語の名人芸「ネタ」の裏側』講談社。  
 時田晶瑞（二〇一八）『辞書から消えたことわざ』角川文庫。  
 山口雅也（二〇一七）『落語 魅捨理全集 坊主の愉しみ』講談社。  
 山本一力（二〇一九）『落語小説集 芝浜』小学館文庫。  
 山本一力（二〇一九）『城下町の発展から市井の人々の多様性、人情、生きがいまで「足るを知っていた江戸っ子」を語り尽くす！』『歴史道 江戸の暮らしと仕事 大図鑑 VOL.2』朝日新聞出版所収。  
 湯島de落語の会編（二〇一七）『落語 修業時代』山川出版社。